

表紙イラスト 秋月からす
蒼井 村正



バッド・テン
尼僧退魔士誕生編

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『バッドシスター 尼僧退魔士誕生編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



バッドショウ

尼僧退魔士誕生編

蒼井村正

表紙／秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

シスター^{りお}理緒

教会に転がり込み、そのままシスターとして居着いた男勝りな美女。古武術と整体術に精通しており、チャイナドレス風スリットの入ったシスター服を身につけている。

シスターシンシア

二十代後半の、教会では最古参のシスター。戒律には厳しく、奔放な理緒の説教役。金髪に巨乳、メガネをかけた生真面目な性格の女性。

シスタールチア

貧乳・幼児体形のシスター。教会で孤児として育てられるた、純情で朗らかな性格の少女。理緒にからかわれながらも、彼女を信頼している。

マザー^{ゆりか}百合香

病気療養のため帰国した先代の修道院長の代行としてやってきた、シスター。年齢は三十代前半だが、実年齢よりも若く見える妖艶な美貌の持ち主。

南国特有の強烈な日差しが、修道院前の広場に照りつけている。

広場に設けられた炊き出し所の前には、百人を超える人ばかりができていた。今日は三日に一度の炊き出し奉仕日。決して豊かとは言えぬ周辺の集落から、温かいスープとパンを求めて多くの人が集まってきているのだ。

ここは東南アジア某国の、貧しい漁村近くにある古い修道院。欧州列強諸国の植民地であつた時代に建てられた石造りの建物は、百数十年の間、熱帯のきびしい日差しと風雨に耐え抜いて、小さいながらもそれなりの風格をまとうている。

「こらあ、ちゃんと並べ、悪ガキども！ 並ばないとスープやらないぞ！」

やかましくはしゃぎ回る子供たちを、シスターの一人がよく通る声で一喝した。

年齢はまだ二十歳になるかならないかといったところだろう。顔立ちからすると東洋系、それも、どうやら日本人らしい。

スラリと背が高く、僧服越しにも、メリハリの効いたプロポーシオンが十分に見て取れた。目鼻立ちのくつきりとしたなかなかの美人だが、鋭すぎる目つきと、シスターらしからぬ荒っぽい動作や口調が、ちよつと怖い印象を与える。

しかし、なぜか子供たちには人気があるらしく、Tシャツ、短パンにゴム草履履きの子供たちは、邪険に扱われながらも、子犬のように彼女にまとわりついている。

「シスター理緒、その言葉遣いは良くないと、何度も注意しましたでしょう」

日本人シスター、理緒の口調をたしなめたのは、二十代半ばの白人シスターであった。いかにも真面目そうな顔に銀縁メガネをかけており、立ち振る舞いにも付け焼き刃でない気品が漂っている。本人はあまり語りたがろうとしないのだが、欧州某国の貴族の血を引くお嬢さまらしい。白人にしてはやや小柄で、細身な体型をしている。しかし、きちんと着こなした僧服の胸元を突き上げるバストは、内に秘めた過剰なポリュームを誇示していた。

彼女の名はシスターシンシア。修道院では最古参のシスターで、病氣療養のために帰国した修道院長の代理を務めている。

「はいはい、口調も態度も優しく愛を持って接しろって言いたいんだろ？ わかってるよ。こらあ！ その黄色いシャツ着たガキ、横から割り込むんじゃないッ！」

「全然わかっていないじゃないですか……」

どんなに注意しても一向に改善されぬ後輩シスターの粗暴さに、生真面目な修道女は困り顔を浮かべてしまう。

「いいじゃありませんか、シスターシンシア」

メガネの下で眉をひそめつつため息をつく修道女の背中に、可愛く澄んだ少女の声がかけられた。

「あ、シスタールチャ、ごめんなさいね、あなたに厨房を任せっきりにしてしまつて」

「いえ、かまいません。パン焼くの、楽しいですから」

焼きたてのパンが入ったカゴを持って、修道院の厨房から出てきた小柄な少女シスターが、朗らかな笑みを浮かべる。

まだ幼さの残る顔立ちで、村人たちと同じ淡い褐色の肌をした、細身な少女である。

彼女の名はシスタールチア。地元の漁師の家に生まれたのだが、事故で両親を亡くし、修道院長に養女として引き取られて育てられた少女である。去年から、修道女見習いとして、修道院の仕事を手伝うようになっていた。修道女としてはまだまだ経験不足だが、院長仕込みのパン焼きと料理の腕は玄人はだした。

「シスター理緒は、確かに口は悪いし、ちよつと気が短いところはありますけれど、村の方たち、特に子供たちには凄く人気があるんですよ」

子供たちとふざけあうシスター理緒を見つめながら、ニコニコと微笑んでいるルチアのところに、話題の主である不良シスターが駆け寄ってくる。本来、尼僧のコスチュームは走るのには不向きな構造なのだが、理緒は僧服のサイドにチャイナドレス風のスリットを入れて、動きやすいように改造してしまっているのだ。当然ながら、規律に煩いシスターシンシアには大目玉を食らったが、今ではもう、諦め半分で認可されている。

「パンのお代わり待ってました！ このガキども、ちっちゃいくせにホントによく食うんだよね。ほおら、ついて来い！」

シスタールチアの手から、パンが満載されたカゴを軽々と受け取ったシスター理緒は、子供たちをゾロゾロと引き連れて木陰へと歩んでゆくと、餌をねだるひな鳥のように群がってくる少年少女にパンを配り始めた。

「シショー、食事が終わったら、カラテ教えてよ」

渡されたパンを美味しそうに頬張りつつ、一人の少年が理緒に声をかけてくる。不良シスターは、子供たちには「師匠^{シショウ}」と呼ばれているらしい。

「ああ、いいぜ、教えてやる。ただし、一つ言っておくがアタシが教えてやってるのはカラテじゃなくって古武術だ！ それと、教わった技をケンカに使ったら、アタシが容赦なく罰を与えに行くからな！」

「オス！」

理緒の言葉を聞いた少年は、真面目な顔になって返事の声を上げる。

「よし、いい返事だ。アタシが教える武術の技を使っているのは、大切な人を守るときだけだ。みんなも、いいな！」

強い光をたたえた目で子供たちを見回し、不良シスターはよく通る声を上げる。

子供たちの間から「オス！」の連呼が起きた。

「元気があって、大変よろしい！ やっぱ子供はこうでなくっちゃな。じゃあ、早速だけど、食後の運動始めるか！」

子供たちは歓声を上げて立ち上がり、理緒の号令に合わせて正拳突きを練習を始めた。

「確かに、人気はあるようですわね。俗に言う『ガキ大将』みたいですけれど」

修道服姿のまま、ズバツ！と空気を裂く音を立てて、切れのいい正拳突きを繰り出しているシスター理緒を見やりつつ、肩をすくめて苦笑するシスターシンシア。

「ええ。子供たちも、シスター理緒に鍛えられて、随分たくましくなりました。それに、自制心もできてきて、つまらないことではケンカもしなくなっただけです」

年齢の近い地元の少年少女たちが、活き活きとしている様子を見ながら、シスタールチアは嬉しげに微笑む。

「そうですわね。二年前、最初に理緒さんとお会いしたときには、絶対にシスターなんて務まらないと思いましたけれど、自分なりのやり方で、村の方たちの信頼を得ましたね」
院長代理を務める白人シスターは、レンズの下に柔和な笑みをたたえてつぶやいた。
生真面目で礼儀と戒律を重んじるシスターシンシア、まだまだ見習いだが、健気に頑張っているシスタールチア、そして、シスターの型にはまらない、豪快で不良っぽいところはあるが、子供たちには絶大な人気のあるシスター理緒。

この三人が、海辺の古い修道院を守る、若きシスターたちであった。

「ふう、炊き出し奉仕も無事終了、っと」

空っぽになった大鍋を洗い終えた理緒は、額に浮かんだ汗を拭いながらキュウツ、と背伸びする。僧服の胸元に、ロケット型に突出したバストの輪郭がくつきりと浮き出すのを、シスタールチアが羨ましげに見ていた。まだ成長途上にあるルチアのバストはお世辞にも豊かとは言えず、口の悪い理緒からは、「ペツタンコ」などとからかわれているのだ。

もう一人の修道女、シスターシンシアも、理緒にも勝る巨乳の持ち主なので、なおさら羨ましがつのつてしまうルチアである。

「さあて、今夜は村の酒場に繰り出して、ビールでも引っかけてくるかねえ」

スリット付きに改造した僧服の裾をパタパタとはたいて、スカートの内側に風を送りつつ、シスターらしからぬことを言う理緒。

スカートの裾がはためくたびに、改造シスター服のサイドスリットから、健康的に引き締まった脚線美がチラチラと垣間見える。

「シスター理緒、はしたない行動は慎んでください！」

眉をひそめつつ、生真面目な声でシスターシンシアがたしなめた。

「えー！ 女同士なんだから、別にいいじゃないか。なあ、ルチア」

「えっ、あ、あの……はい……そ、そうですね……」

理緒の奔放な姿に見とれていたシスタールチアは、いきなり話を振られ、曖昧な表情を浮かべて頷いた。

「ほおら、な。いつも戒律戒律でガチガチになってたら、肩が凝って仕方がないぞ。もっと柔らかく生きなきゃ。ほら、やっぱり肩が凝ってる……」

軽い口調で言いながら、シスターシンシアの背後にスルリと回り込んだシスター理緒は、規律に煩い先輩修道女の肩を揉み始める。

「シスタールチアは、シスター理緒を甘やかせすぎですわ！ あっ！ およしなさい……ん……んふう……」

軽く抗う素振りを見せたシンシアであったが、じきに心地良さげな表情になり、不良シスターの指に身を委ねた。

シスター理緒は、古武術とともに身につけた整体術を使い、村人たちの治療奉仕を行っているのだ。医薬品を使わずに打ち身や捻挫、骨格の歪みを矯正する整体術は、重労働で身体を酷使用する漁村の人々を、おおいに助けていた。

「ほら、だんだん解れてきた。……しかし、でかいオッパイだよな、こいつのせいで余計に肩が凝るんじゃないの？ ほれほれ、気持ちいいですかあ？」

調子に乗った理緒は、僧服越しにポリウムを誇示しているシンシアの巨乳を、ムニユンッ！ と揉みこねた。

「きやわあっ！」

真面目一途なシスターとは思えぬ素^すっ頓^{とんきよう}狂な声を上げた修道女は、凄い勢いで指を振り

ほどき、眉をつり上げて不良シスターを睨みつける。色白な顔は真っ赤になり、メガネのレンズの下で見開かれた目には、怒りの炎が燃えていた。

「ちょ、ちよっと、マジに怒るなよ。冗談だよ、冗談……」

「にっ、二度とこんな下品な悪ふざけはしないでくださいませッ！ わたくしの身体は神に捧げた身ですよ！」

胸を押さえ、息を荒げて言い放つシスターシンシア。

「ごめん。悪かった……わたしの悪ふざけがすぎましてございます……」

メガネシスターの剣幕に圧倒された理緒は、詫びの言葉を口にしてうつむく。

内心では（やっぱりこいつは超堅物だな……） などと思っていたりするのだが……。

「わ……わかればよろしいですわ」

荒くなった呼吸を鎮めつつ言うシスターシンシア。その手は豊かなバストを押さえたまままだ。

「あ、一つ言い忘れていましたが、今日の夕方には、新任の修道院長が来られる予定になっています。ですから、シスター理緒も、行動や言動には、くれぐれも気をつけていただきたいですわね」

「えっ？ そんなの聞いてないよ。アタシはてつきり、シンシアが昇格するんだと思ってただけ」

シンシアの言葉を聞いて、意外そうな表情を浮かべる理緒。その隣で、シスタールシアも驚きの表情を浮かべている。

シスターシンシアは、まだ二十代の若さだが、地元住民の人望もあり、欧州某国の貴族の末裔という家柄から、教会本部にも顔が利く。辺境の修道院長になるには十分すぎるほどの資質であった。

「まだまだ若輩者のわたくしごとときには、修道院長は務まりませんわよ。確かに、新しい院長が今日来られるということに関しては、少し急なお話でしたけれど……」

メガネのずれと僧服の乱れを直しながら、生真面目なシスターは言う。

教会本部との連絡を一手に引き受けているシスターシンシアにとっても、新任院長来訪の件は唐突なことだったらしい。

「まあいいや、口うるさい人じゃなければいいんだけどな。酒好きでシャレのわかるマザーだと百点満点！」

「まったく、あなたという人は……」

シスター理緒の軽口には肩をすくめ、ハアーツ、と大きなため息をつくシスターシンシア。すくめた肩が妙に軽くなっているような気がするの、不良シスターの肩揉みが効いたせいなのだろうか……。

「ああー、暇だなあ。腹も減ったし、早く来いよ、新任マザー」

気の抜けた声で言いつつ、シスター理緒は、自室のベッドでゴロゴロしていた。メリハリの効いた肢体にまとっているのは、シンプルな白のTシャツとショーツだけというあられもない姿である。

新任院長を歓迎する晩餐の準備は、ルチアとシンシアが受け持っているため、料理の腕が致命的に下手な不良シスターの出番はない。理緒はもっぱら、力仕事と買い物の担当なのだ。

暇を持て余し、下着姿で柔軟体操をしていたシスター理緒の耳に、今にも壊れてしまいそうなエンジンの音と、音程の外れたクラクションの響きが聞こえてきた。

「ん？ 新しい修道院長が来たのか？ どれどれ、どんな人かなあー」

好奇心剥き出しの表情を浮かべた理緒は、僧服を手早く着ると、修道院の玄関へと向かう。開け放たれた扉の前には、シスターシンシアとシスタールチアがすでに待機していた。日本では絶対にお目にかかれないような、汚れ放題、ボロボロのタクシーから降り立ったのは、東洋系の美女であった。見かけの年齢二十代後半から三十代前半ぐらい、僧服の頭巾から覗く顔は、修道女らしからぬ妖艶な色香を放っている。

「マザー百合香と申します。よろしく」

女性はクールな口調で名前を告げて一礼する。

（妙に色っぽい女だな。それに随分若い。これならシンシアが修道院長にランクアップでよかったんじゃないの？）

想像以上に若い修道院長に無遠慮な視線を注ぎつつ、理緒は思う。

マザー百合香と名乗った修道女は、見れば見るほど妖艶な女性であつた。

黒々と濡れ光る瞳は、性別、年齢を問わず魅了するような妖しいきらめきをたたえて若きシスターたちを見つめてくる。常に濡れ光っているような、やや厚めの唇が、成熟した女性の色香をさらに際立たせていた。

「ようこそいらつしやいました、マザー百合香。わたくしはシスターシンシア。こちらがシスター理緒、そして、彼女がシスタールチアです。よろしくお見知りおきを……」

修道女たちを代表して、シスターシンシアが挨拶をする。

「こちらこそ、よろしくお願いいたします。みなさん、お若いんですね。それにお美しいですわ」

マザー百合香の濡れた朱唇が、にんまりと妖しい笑みを形作った。

翌朝から、マザー百合香は、誰も入らぬように言いつけてから礼拝堂に一人こもり、晚餐のときまで出てこようとしなかった。昼食は、シスタールチアが差し入れたのだが、それにもほとんど手をつけなかったらしい。

チュクッ……と小さな濡れ音を立ててルチアのヴァギナから舌を引き抜いた百合香は、唇にこびりついた新鮮な淫蜜をねつとりと舐め取って味わう。

「若き乙女の絶頂波動を糧に、目覚めなさい、海の淫魔！」

口元を拭って立ち上がった破戒尼僧は、自分の手の平をナイフで傷つけ、溢れ出す血潮を魔法陣の中心に滴らせた。

邪教の術式を使って描き込まれた魔法円をねつとりと濡らした淫水溜まりに、真紅の血が点々と降り注ぐ。

血と愛液を触媒として注がれた魔法陣が、カッ！と妖しい赤光を放った。

「封印は解けたわ！ 数百年の間、閉じ込められた地の底より出でて、生け贄に魔の洗礼を与えたまえ！」

ビシッ！ ビシッ！ メキッ！ バキイイイインッ！！

石床を突き破り、何十本もの触手が伸び出てくる。太いものは丸太ほどもあり、細いものは直径数ミリほどしかないが、そのどれもが同じ形をしている。

それは、一見したところでは巨大なタコの触腕に見えた。しかし、分厚い粘液の層に包まれたその表面は、蛇の胴のような鱗に覆われており、ヒュクヒュクと卑猥な収縮を繰り返す大小無数の吸盤中央には、舌状の突起が突き出てチロチロと閃いている。

さらに、触手の先端は、男性器の亀頭にそっくりな形状をしており、鈴口状のワレメか

らは、白濁した粘液をトロトロと滴らせていた。

「ああ、なんと美しく淫らな形……身体と魂が震えるわ。さあ、わたしが捧げる供物を存分に味わいなさい！」

妖艶な美貌を恍惚^{こうこつ}に歪め、夢見るような声を上げるマザー百合香。

生物学的な常識から逸脱した、異形の触手は、シンシアとルチアの身体をたちまち絡め取り、ジュルジュルと粘液の鳴る音を立てて蠢き始めた。

「ひいっ！ ひあああああッ！」

強烈すぎる快感によつて、失神状態から現実に取り戻されたシンシアは、礼拝堂内に声を響かせて絶叫した。

激しい身悶えのたびに、プリュンッ、プリュンッ！ と揺れ弾む豊乳にも、吸盤触手が絡みつき、乳房の形状が変形するほど締め上げる。内圧の高まりによつて勃起を強めたピンの乳首を、舌付きの吸盤がブチュッ！ と吸い込んだ。

「くわああああッ!!」

肉果がギチギチと締めつけられる苦痛と、それを遙かに上回る乳首吸いの快感に狂乱するメガネシスター。乳輪ともども乳首に密着して吸い上げた吸盤の内部では、小さな舌状の器官が休みなく蠢いて、勃起乳頭を舐め転がしている。

ヌチュッ、プチュプチュプチュッ、ジュルッ、ジュルッ、ズジュルルルッ……。

「ふわあ、キャフツ！ ダメえ、そんなにされたら、オシッコ出ちゃうつ、アツ、出るッ

あああああゝッ!!」

粘液と愛液のぬめりを混ぜ合わされて、秘裂をクチュクチュと瓢られていたルチアが、
 込み上げてくる尿意に屈して熱い尿水を迸らせた。

プシイイッ！ シャアアアアッ！

秘裂の奥から噴出する尿液を、触手どもは先を争って吸い込んでゆく。

「あらあら、お漏らしとは恥ずかしい子ね。でも、それさえも淫魔にとつては美味なる糧
 なのよ……」

羞恥心さえも焼き尽くすほどの肉悦に痙攣する白と褐色の裸身が、触手によつて宙吊り
 にされた。人外の快感に泣き喘ぐ口に、ペニスそっくりの触手がジユブリと突き入れられ、
 口腔を掻き回す。

トロトロと注ぎ込まれる白濁の汚液を、快楽に屈した二人のシスターは、コクコクと喉
 を鳴らして飲み込んだ。

「堕ちたわね。これで、シスター理緒が帰ってくれば……フフッ、淫魔の力はわたしの
 もの！」

狂気さえ感じさせるマザー百合香の哄笑が、絶え間なくいき続ける二人の嬌声きようせいを圧して
 礼拝堂の中に響き渡った。

痛いほどにしこり勃った勃起乳首をピンッ！　ビインッ！　と激しく弾き飛ばれる。ムツチリと弾力のある筋肉のついた尻たぶも、贅肉のかけらもない脇腹も、背筋のまるやかなラインを浮かび上げらせる背中も、全身全てを性感帯として燃え立たせてしまう、魔性の粘液マッサージであった。

想像さえしていなかった魔性の責めに、快感慣れしていない肉体が耐えられるわけがなかった。

「くあああああーッ!!　アッ、アッ、アッ、あはあああーンッ!!」

勝ち気で姉御肌の不良シスターとは思えぬ甘い声を上げて、シスター理緒は悶え狂わされてしまう。まるでジェットコースターのような勢いで、絶頂がやって来た。

粘液まみれの裸身が、鍛え抜かれた筋肉の輪郭を浮き出させて硬直し、ビクッ、ビクビクンッ！　と激しい痙攣を起こす。濡れ光る内腿を、膣奥から溢れ出した絶頂の証がちよとチョロと流れ伝っていった。

「あらあら、あつさりと果ててしまったのね。でも、まだまだこれからよ。もつともつと狂わせて、精気を搾ってあげるわ」

マザー百合香の妖艶きわまりない声が、礼拝堂の中に響いた。

「んあ！　ああああ……も、もう……ダメえ、アッ、イ……イく……ウウウッ!!」

絶頂を告げる声を礼拝堂の中に響かせながら、シスター理緒は、引き締まったヒップをグンッ！ グンッ！ と跳ね上げて、もう何度目ともわからぬエクスタシーへと舞い上がった。あれから何度、喜悦の頂点を極めさせられたのか、淫熱でトロトロに煮溶かされた脳では把握できなくなっている。

しなやかに鍛え上げられた裸身を、ビクッ、ビクンッと跳ねさせて絶頂に翻弄される理緒の股間には、シスターシンシアが顔を埋め、ピチャピチャと舌なめずりの音を立てて秘裂を舐めしゃぶっている。喜悦の波が押し寄せるたびに、緊張と弛緩を繰り返すヒップの谷間には、親指ほどの太さの触手が挿入され、ヌルヌルと蠢きながら、緩やかな注挿を繰り返していた。触手は理緒のアヌスを深々と抉り、背徳の肛門エクスタシーを数限りなく与えながら、奥へ、奥へと這い進んでゆく。

「チュパァ……んはぁ、シスター理緒のラブジュース、美味しいですわ。もつと飲ませてくださいませ。んふ……チュピチュピチュピ……チュルッ、ジュルルルッ！」

相変わらずのお嬢さま口調で言いながら、シスターシンシアは、後輩修道女の秘裂にむしゃぶりつき、はしたない音を立てて淫蜜をすすり飲んでいく。

執拗なクンニリングスを続けながら、左右に艶めかしくくねっているシンシアのヒップにも、理緒のアヌスを犯しているのと同じ太さの触手が挿入されており、Gカップオーバ―の巨乳も、細い触手でギチギチと緊縛されていた。肛門と乳房から送り込まれる背徳の

快感で理性を飛ばされた巨乳シスターは、普段の厳格さを完全に失い、発情した牝と化して、陵辱行為に加わっているのだ。

「シスター理緒、わたしのオマ○コ、舐めてください」

可愛らしい声で卑猥な言葉を口にしながら、シスタールチアが、理緒の口に無毛の秘裂を押しつけてくる。褐色肌の見習いシスターも、アヌスの蕾つぼみに細い触手を受け入れ、小さな乳首を吸盤でチュパチュパと吸いしゃぶられていた。

（だ、ダメだ……。気持ちよすぎて、頭の中グチャグチャになってる……）

「んふう……ンッ……ピチャ、ピチャ、ピチャ、チュルルッ……」

理緒は、ぎこちない舌使いで少女のワレメに奉仕し始めた。舌に広がる甘酸っぱい愛液の味が、たまらなく美味しく感じられる。

「ふあ、アッ、あああんっ！　そこお、もつと舐めてえ！」

ささやかな膨らみと、尻の蕾を触手に觸られながら、褐色肌の少女は、理緒の舌に腔口を力強く掘り返されて喜悦の声を響かせた。

華奢な褐色ボディをのけ反らせるルチアの裸身に、白濁の粘液がポタポタと垂れ落ちてくる。粘液の源泉は、頭上で逆さ吊りになったまま犯されている、シスタークレアの身体であった。

「んふううう、ンッ、ンッ……んんん……ごふっ！　んぶふううううッ！！」

宙吊りになったシスタークレアのアヌスとヴァギナでは、人の手首ほどもある触手が激しい注挿を続けていた。ジュポジュポと音を立てる抜き差しのために、女の体液と入り混じった大量の白濁液が噴き出し、雨だれのように滴り落ちてくる。喘ぎ声が低くぐもっているのは、口にも男根サイズの太さの触手が突き入れられているからだ。

ボロボロに切り裂かれたコスチュームは、身体を隠す衣類としての機能を完全に失っており、あらわになった白い素肌には、触手の攻撃で受けた皮下出血の痕が痛々しい。まだダメージの残る退魔シスターの柔肌を、触手の吸盤がチュパチュパと吸い鬦り、赤い吸い痕をいくつも刻み込んでいた。

四人のシスターたちが発する快楽波動と新鮮な精気は、触手を通して吸い上げられ、淫魔と融合したマザー百合香に送り込まれている。

喜びに悶える人の身体から発生する、命の波動そのものを糧とする。それが淫魔の食事であった。

「あなたたちの悦びの波動、最高に美味しいわ。そろそろ仕上げと行きましようか。淫魔の精を子宮に流し込んで、忠実な快楽奴隷にしてあげる！」

龟头状の先端から、白濁の汁をトロトロと滴らせる巨根触手の群れが、修道女たちの秘裂を狙ってくねり寄ってきた。

「あああん、もっと、もっと飲ませてえ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>